2023年7月の選評に代えて　　高橋修宏

風鈴の内臓部分に満ちる闇　　（桜望子　山形県）

「内臓部分」とは何か。「闇」とは何であるのか。あらかじめ非在であるものが、このように記されることで生々しく立ち上がってくるようだ。言葉によって形象化された〈虚〉の一句。

汚す　地図で君の家を見つけ出す　　（合川秋穂　東京都）

どこか偏執的な感情をイメージさせる一句。もしやすると、ストーカーと呼ばれる者の心理を切り取っているのだろうか。

午後の　　（大橋　弘典　群馬県）
往診
向日葵迷路に
園児が消える

白昼夢のような感触をひそめた作品。とりわけ「向日葵迷路」という造語が、効果的だ。おそらく「園児」たちは、消えたまま戻らなかったのかもしれない。

月光にピアノの蓋を閉じ卒業　　（長谷川柊香　宮城県）

あるプライベートな振るまいが、静謐のイメージを喚起する一句。「月光」、「ピアノ」、「卒業」という言葉の距離感も絶妙である。

ピアノを　　（立花ばとん　東京都）
こぼすみたいに

ゆっくりと弾く、夏

同じく「ピアノ」をモチーフとしながらも、この作では弾くことが描かれている。「こぼすみたいに」という直喩の形容によって、ここで奏でられる曲のイメージさえも立ち上がってくるようだ。

日報にみつばちのひみつを記す　　（松下　誠一　東京都）

なじみのある存在でありながら、「みつばち」の生態には、まだ多くの謎があるらしい。「みつばち」、「ひみつ」とひらがな表記にすることで、〈蜜〉と〈密〉が入れかわるような不思議な感触を秘めた一句となっている。

「わたしのこと　　（青野陽　熊本県）
嫌いにならない？」
台所で話したかったのは
それだけだった

まるで谷川俊太郎の詩集タイトルを想起させるような作品。「台所」という日常的でありながら、日々の食に関わる大切な場所であるために、そこで発せられた言葉は掛替えのないものとなっているのか。

つまさきに影をまぶして　　（からすまぁ　神奈川県）
終わりそうな岸を歩いていった
朝とか

淡い色調で描かれた水彩画のような作品。時間とともに消え入りそうな輪郭で描かれながらも、どこか清浄なイメージを届けてくれる。なかでも結句の「朝とか」は、秀逸。

葉を枯らす生命力のミニトマト　　（杢いう子　佐賀県）

かつて俳人の永田耕衣は、老いをめぐって〈衰退のエネルギー〉という至言を残している。この一句の「枯らす生命力」という一見、矛盾した表現も、そんな耕衣の言葉に通じるものがあるあずだ。

冷たくて　　（いまはじまるの　兵庫県）
ちょっと温くて
気持ちいい
思い出は石
空から来たんだ

もしや、隕石をめぐる寓喩なのだろうか。冷たく、温く、また気持ちいい、という感覚的な言葉を連ねることで、地上的な存在をほのめかしながら、結句の「空から来たんだ」によって反転させている。この不思議なユルさにも魅かれた。

わたしはわたしを遠ざけて　　（こはくいろ　大阪府）
生きながらえた、鈴の音がする。

この作で遠ざける「わたし」が象徴するのは、自我なのか、利己なのだろうか。たしかに「わたし」だけが肥大したとき、現在のような分断や戦争、あるいは深刻な環境危機が生起したことは間違いない。結句の「鈴の音」に、救いのような響きを感じるが…。

人形を抱え込んでる人形を　　（辻村陽翔　北海道）
抱えることしかできないでいる

「人形」というモノをめぐる二重の〈入れ子〉のような作品。そんな人の形（かたち）をしたモノを抱えることしかできない主体もまた、すでに「人形」と化しているのかもしれない。

ソフトクリームの巻き方を　　（真島しましま　千葉県）
君が
教えてくれたときの
からだを
おぼえてる

「ソフトクリーム」自体ではなく、そのときの君の振るまいを前景化させたトリッキーな作品。もはや君のからだ自体も、「ソフトクリーム」のように軟らかな螺旋を描いたように見えてくる。

したことのない潮干狩りの　　（手塚桃伊　東京都）
思い出が夏の隙間にゆっと
立ち上がる

現在のネットやバーチャルな社会に生きている者の自画像のような作品。「したことのない」にも拘らず、思い出が立ち上がるとは、すでに現実と仮想を行き来している者にとって、ひとつの日常なのかもしれない。だが、そこに身体的なリアリティはあるのだろうか。

さらら さっ　さくら　　（かわなご　まい　埼玉県）
ぽ・ぽぽっ たんっぽぽ
バランッ。バララン。バラ

〈さくら〉、〈たんぽぽ〉、〈バラ〉という三つの花の名前を音に分解して表記させた作品。すでに詩人の那珂太郎による先駆的な優れた試みがあるが、日本語における〈音〉という分野は、まだ開拓され尽くしていない未開の領域が残されているのかもしれない。